Operation Raleigh News

Operation Raleigh
DENSO

No.38

昭和62年(1987)12月10日(木)
毎月1回発行

●発行所　オペレーション・ローリー日本委員会
〒104 東京都中央区築地1−7−10 築地オーミビル502号
電話　東京(03)544−7413

●このオペレーション・ローリーニュースは日本電装㈱のご協力で制作されたものです。

インドネシア・フェイズ帰国後アンケート

ビナヤ山で見た夕陽に感動

有意義だった爬虫類プロジェクト

7月から9月までの約3ヵ月間、セラム島を中心としたインドネシア・フェイズに参加していた大塚聡子さんと内藤泰朗君が帰国後アンケートに以下のように回答してくれました。

――ORへの当初のもくろみは？

内藤　タダでしかも普通の海外旅行と違うことができると思って。活動地もユニークだと思いました。

大塚　外国の友だちをつくり、文明から離れた生活で自分を試すこと。自然に接し、自然の姿を見つけることでした。

――帰国後のORへの評価は？

内藤　僕は自分なりのORを実現できたと思うし、これからの自分のワンステップになってよかったと思っています。

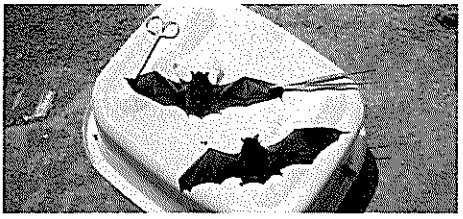
大塚　大きく見ればとてもよい計画だと思います。しかし、小さく見れば組織力、計画性などで少し問題もあったように感じました。

▲ヘリコプターの前でニッコリ(大塚さん)

――苦労したことは？

内藤　女の子が多かったので、人間関係に苦労しました。

大塚　ベースキャンプ間の移動、細かいことでの言葉の意味、朝食のポリッジ（かゆ）が食べられなかったこと、蚊にさされた跡の化膿。


▲コウモリの標本づくり(展翅)

――楽しかったことは？

内藤　女の子が多い苦労は楽しくもありました。自然が美しかったことも楽しいことでした。

大塚　友だちができたこと、ヘリコプターに乗れたこと、熱帯雨林で快適に暮らせたこと。

――印象的だったことは？

内藤　ビナヤ山で見た夕陽。

大塚　自然の力の偉大さです。またほとんどのインドネシアの人々が日本軍の戦争中の侵略行為を知りつつイギリス人よりも日本人にむしろ親切にしてくださったこと。

――有意義だったことは？

内藤　コウモリと植物（花）とバイオ・リリースという活動を僕はやりましたがみんな有意義でした。

大塚　爬虫類プロジェクト。私の専攻が動物生態学ということもあって1ヵ月半ほど続けて爬虫類プロジェクトをやりました。後半には科学者のアシストという形で標本づくりや分類などの仕事もさせてもらえました。

――事前にマスターしておきたかったことは？

内藤　インドネシアのことについてもっと調べておけばよかった。

大塚　英語でのジョークや演しものです。日本についての知識。とくに宗教について。

――日本人と外国人の違いは？

内藤　あえて違いをいうと、よくいえば外国人は「個人を大切にする」悪くいえば「勝手」。しかし、それはその人の人格によります。

大塚　「働く」ということに対する考え方の違い。外国人は仕事はしたければすればよい、という考え方の人が多い。

――いま、最もやりたいことは？

内藤　頭の熱いうちにこの体験を自分でまとめてみたい。

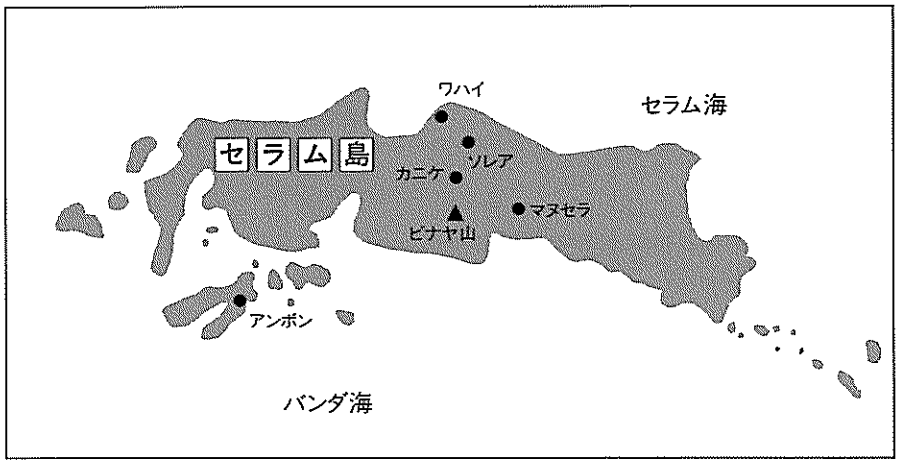
大塚　再びORに参加したい。爬虫類プロジェクトのあるフェイズがあれば科学者のアシストとして参加したいです。

――協賛企業・日本電装への外国人たちの反応は？

内藤　とても興味をもっていて色々聞いてきました。日本電装のORへの協賛を知り、日本人ベンチャラーをうらやましがっていました。またこのような企画にお金を出す日本電装という企業を「すばらしい会社」だと誉めちぎっていました。

大塚　Tシャツやトレーナーなどをもらってきていたため、みんなにうらやましがられました。日本電装についてかなりの外国人が興味をもっていました。

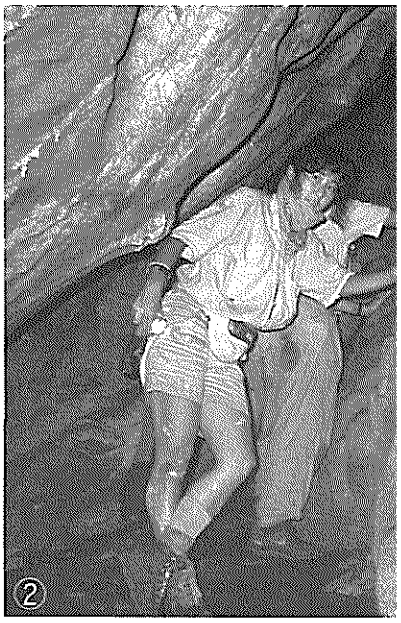
インドネシア・フェイズはセラム島が舞台

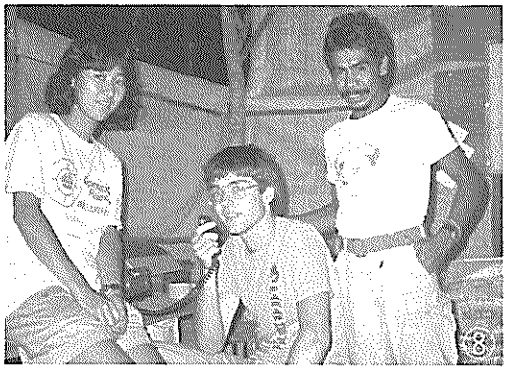


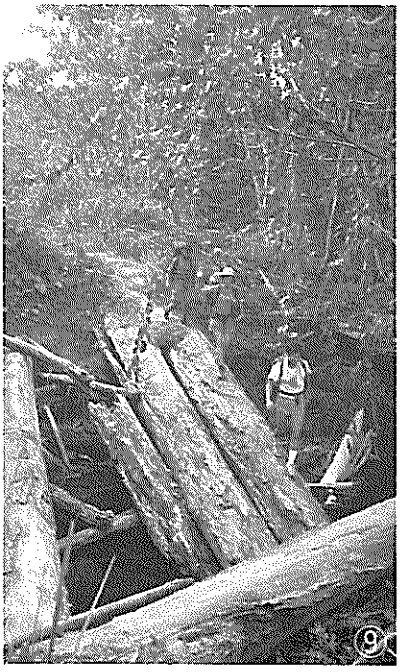
７月から９月にかけて実施さ
ア・フェイズには大塚聡子さん
米山達郎君、村橋靖之君、川村
和さんの６名が参加しました。
東経130°、南緯3°あたりのセラム
アの首都ジャカルタから2,500km
赤道直下の島です。編集部では
の週報や日本人ベンチャラーの
動経過をまとめるとともに、活
紹介します。

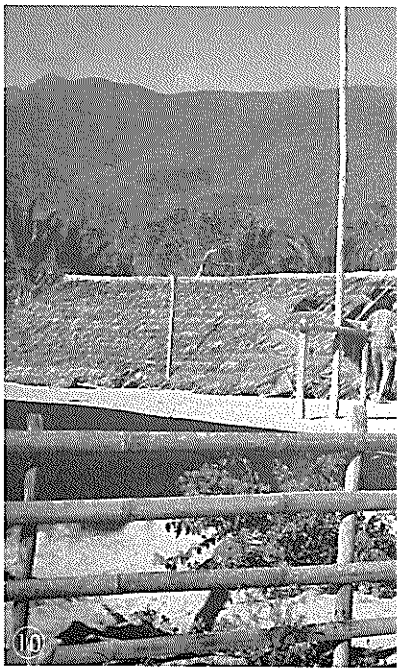
コウモリ・爬虫類・昆虫などの調査

標高3,055mのビナヤ山登りも









〔写真説明〕
①アンボン行リンジャニ号出航前セレモニー②グア・カイナポロ洞窟での中窪さん ③マヌセラ村の女の子とあやとり④ビナヤ山頂付近での内藤君⑤大型コウモリをもつ西独ベンチャラー ⑥狭い洞窟を腹ばいで進む ⑦洞窟内の小型コウモリたち ⑧通信室で日本とも交信した中窪さん(左) ⑨ワハイ＝ソレア間の山道⑩マヌセラ村の小学校改装作業 ⑪カニケ村での戦いの踊り「チャカレレ」

たインドネシ
内藤泰朗君、
人君、中窪美
要な活動地は、
，インドネシ
東のほとんど
英国本部発行
りなどから活
内容を写真で

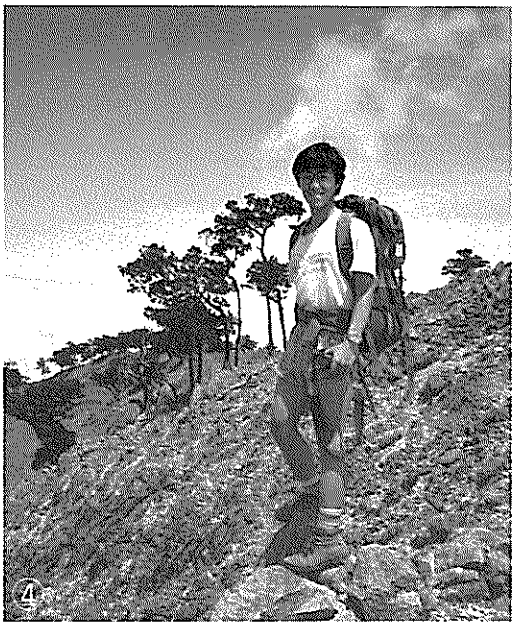
75名のベンチャラーたちは、7月10日ジャカルタに到着。そこで約5日間のトレーニング・プログラムに参加しました。7月15日、ベンチャラーたちは国営船リンジャニ号に乗って、スラバヤ経由でセラム島のアンボンへ4日間かかって移動。さらに3隻の船に分乗してワハイに到着。インドネシア政府はヘリコプターを提供し、装備輸送に協力してくれました。ワハイからは徒歩で大きな荷物を背負いキャンプ地へ出発。数班に分かれ、次のようなプロジェクトを体験しました。

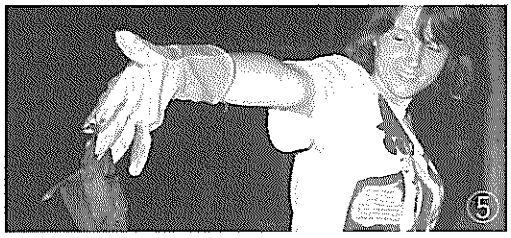
〔科学〕熱帯雨林の植物・土壌調査。シダ、ランなど植物やコウモリ、爬虫類、鳥類、両生類、甲虫類、蛾、スズメ蜂などの調査のほか、イノシシ調査、セラム島の貴重な植物史調査など。

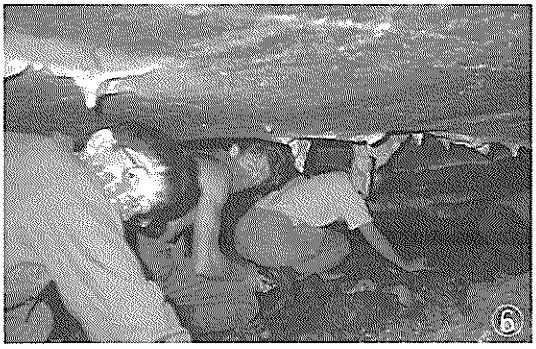
〔奉仕〕学校の修理、書物の寄付、農業、家畜の飼育、砂糖づくり、伝統工芸、塩づけ魚づくりなど。

〔冒険〕洞窟壁画さがし、ジャングルのトレッキング、シュノーケリングなど。

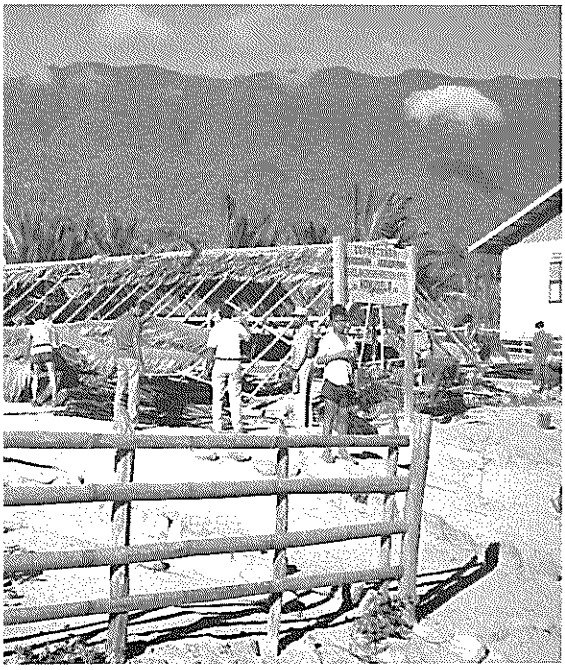
③


④


⑤


⑥

⑦



⑪

日本代表派遣青年のページ

トレッキング
道づくりや徒歩旅行も

パキスタン・フェイズ

9月から11月の予定でパキスタンフェイズに参加している日本人ベンチャラーたちからのたよりです。

調査サボって魚とり

うすぐらいランプのもとですきっ腹をかかえながらミーティングにそなえて待機しているところです。きょうはもしかしたら叱られるかも知れません。サイエンティフィック・スタディがあまりにも退屈なんで、パキスタンのベンチャラーとさぼって釣りに行ってしまったからです。いまではもう必要なくなったモスキートネットを網にして裸足になって追い込んでつかまえた魚は小さかったけれど、ポイントにたどりつくために渡ったつり橋や粘土質の砂浜に足を踏み入れた感覚は忘れることがないと思います。これからはもっと意識的な毎日を送れるよう、自分で一日の計画を立てていきたいと思います。(10月11日・高橋央美)

パスーで自然調査

央美ちゃんと僕のパスー（自然調査活動のベースキャンプ）入りとともに、太陽は厚い雲に阻まれて姿を見せなくなり、寒い日が続いています。僕らのここでの活動は主に植物調査なのですが、残念ながら調査活動自体は充実したものではありません。周辺の村や湖に行ってパキスタン人の植物学者の説明を受けたり、四方に張ったロープの中の植物の数を調べたりするぐらいで、リーダーやスタッフは日程を埋めるのに苦心しているように思われます。ベンチャラーも「退屈だ！」を連発。熱心とはとても思えません。しかし、これまでの道路づくりとは違い、このキャンプでは自分のペースで毎日を送れるため、僕自身は休息と外国人ベンチャラーとの交流の場と割り切り、ムダにはしないつもりです。アライアバッドの道路づくりのキャンプでは仕事も大変でしたし、外国人ベンチャラーと馴染むのに時間がかかったこともあって、肉体的にも精神的にも少々辛い毎日でしたから。

この前はパキスタン人のベンチャラーがしとめてきたカモをさばきました。羽根をむしり、皮をはぎ、内臓を出します。日本では壁の向こうで密かに行なわれていることが、パキスタン人ベンチャラーと僕の手によって行なわれました。柔らかな羽毛の肌ざわりと生き物のもつぬくもりがまだ手に残っています。

パキスタン人のベンチャラーは毎夜一部屋に集まって歌を歌います。いつまでもいつまでも歌います。ひとりがひっくり返した皿をドラムがわりにタンタカ、タンタカと伴奏をつけるのを見て以来、央美ちゃんはそれをマスターするのに夢中です。自分で歌い自分で伴奏をつけ、いつまでもいつまでも練習しています。10月25日から3週間連続の山歩きが始まります。また辛い日々かも知れませんが、ORをもっともっと楽しんで帰るつもりです。

(10月20日・山下彦二)

寒さの中で道路づくり

この風景はわれわれのキャンプから見えるものです（表面は山の写真の絵葉書)。この山のベースキャンプに央美ちゃんと彦二は行ったことがあり、私と菅原さんのグループもきょうあたりから行くはずだったのですが、10日、11日と雨がひどく、山のてっぺんには雪雲がかぶさっており、道路は土砂崩れで不通。ただいま見合わせ中です。私たちはいまアライアバッドのコミュニティ・ベースキャンプにて道路づくりをしています。毎朝7時過ぎに始め、13時に終えます。寒くて仕事中以外は長袖Tシャツ、毛セーター、ジャンパーを着て、背を丸めています。15日間トレッキングは毎日8時半から5時頃まで歩き、7時頃に寝て5時半に起きる、という生活でした。いまでは想像しにくいほど暑くて、お昼は必ず川で食べました。そのひとときがどんなに幸せだったことか！文明が川のあるところから起こったことを身をもって感じた日々でした。

歩いたコースはナラン、サフルマルーク湖、バタクンディ、ブロワイ、チュトバ、シネラバック、バブサー峠、ギティダス、チャッタガリ、グナルファームへ。2日おいてナンガバルバットのベースキャンプへ4日トレッキングをして冒険旅行を終えました。(10月22日・志村秋子)

帆船ゼブ号ベンチャラー

ダーバンで交代

帆船ゼブ号で9月中旬セイシェルから南アフリカのケープタウンに向かっていた一矢君と江頭君は2ヵ月半の航海をダーバンで終了し、そこでベンチャラーの交代が行なわれました。以下は、一矢君からの葉書の抜粋です。

9月16日に日本を出発して以来、すでに2ヵ月が過ぎ、あと一週間でゼブ12Gフェイズも終りを迎えようとしています。セイシェル～ケニヤまでは順調にスケジュールをこなし、ケニアでの2週間の滞在では、野生動物観察のサファリ・キャンピング・ツアーを体験したりして楽しみました。その後、何人かがマラリアにかかったため、モンバサ出港が少し遅れ、そこらへんから航海はだんだん雲行きが怪しくなりました。ピーター船長が肝炎で寝込み、コモロでは入国を拒否され、仕方なく仏領マヨット島へ。マヨット島を出港してからは、逆風と海流に阻まれ、予定の1週間を大幅にオーバーして、17日間かかり、ゼブ号航海の最長時間を記録。おかげで希望峰回りの夢は海の藻屑と消えてしまいました。

いろいろとありましたが、よい経験になりました。ウォッチ・リーダーの資格も取れました。僕は、この後、ひとりアフリカに残り、あちこち旅行するつもりです。

(11月22日・ダーバンにて一矢好彦)